

〔曲名〕 Radetzky Marsch

ラデツキー行進曲

〔曲種〕

〔作曲者〕 Johann Strauss 1

ヨハン・シュトラウス 一世

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

1804年ウィーン～1840同地。

ヴァイオリン奏者、指揮者、作曲家(奥)で「ワルツの父」と云われる。

少年時代に製本屋で働いていたが、そこを抜け出し、ヴァイオリンや和声楽を学び、15才でパーマーの楽団に入った。

18238年、ワルツの演奏で知られていたランナーの四重団に入ってヴィオラを弾き、後にはランナーの組織した管弦楽団の指揮を行った。

1825年、最初のワルツを作曲。

その翌年、独自の管弦楽団を作ってこれに対立した。

ウィーン風舞踏曲の作曲及び演奏で間もなくランナーを凌ぐ名声を博し、1833年から翌年にかけてドイツ各地、

1837-38年には全ヨーロッパに演奏旅行し、ウィンナ・ワルツを世界的なものにした。

1845年、ウィーンの宮廷舞踏会の指揮者に任ぜられた。

152曲のワルツほか多数の舞踏曲により、ウィンナ・ワルツの基礎を作った人とされている。

(音楽の友社の音楽辞典人名篇より)

ラデツキー(Radetzky Joseph wenzel、1766-1858)はオーストリアの軍人、多くの戦争に参加し(1788以来)元帥(1836)、

ロンバルディア、ヴェネツィア王国の総督(1849-57)となる。

ことにクストーザ(1848)、ナヴァラ(1849)におけるサルデーニャ軍に対する勝利によって著名。

(岩波西洋人辞典より)

オーストリアの宰相メッテルニッヒが盛んにウイナ・ワルツを奨励して、人心を政治からそらせるように仕向けた。

1843年3月、この保守的なメッテルニッヒ政権に対して学生や労働者たちが中心となって武力攻撃を加え、皇帝を退位させることに成功した。

しかしヨハン・シュトラウスは政府側に協力し、その士気を盛り立てるために、かつてイタリアを征服した勇将ラデッキーの名前をつけた行進曲を書いた。

それが「ラデッキー行進曲」である。

結局のところ、この革命は失敗に終わったのだが、「ウイーンを革命から救ったのはシュトラウスである」と云われているのはこのために他ならない。

(河出書房「世界音楽全集」18より)

筆者はかねがね、マンドリン音楽は何と云ってもメロディの美しさが最優先するという考え方から専ら甘美な叙情的なものに重点を置いて紹介してきたが、

本集では少し趣きを変えてリズムミックなものを集めた。

本曲などは誰でも知る耳馴染み深いもので、既に多くの編曲があるものと推察しているが、レギュラーのオーケストラではアンコール曲として定着しているほどである。

マンドリンをもってしても、よい演奏さえすれば、奏者も聴衆も、マンドリンのオリジナル佳曲の感銘に劣るものではない。

1993年 11月 発行

マンドリン合奏曲集 9集 (JMU版 パート譜付) より